

散策おすすめコース



※見学には事前の連絡が必要です。

編集

小松観光ボランティアガイドの会「ようこそ」

お問い合わせ

(一社)こまつ観光物産ネットワーク
TEL 0761-24-8394
〒923-8650 石川県小松市小馬出町91



芭蕉ゆかりの寺社

1 菟橋神社 (諏訪宮)



地元ではお諏訪さんと呼ばれ親しまれており、江戸時代から伝えられているお旅まつりの行われる神社である。元は、小松城内の兎御門内にあり城の守護神とした。芭蕉は祭礼(西瓜祭)があることを聞き参拝している。

小松市浜田町イ233 ☎0761-24-2311

2 建聖寺



曹洞宗のお寺で山号を永龍山という。芭蕉と同行していた立花北枝が、師の面影を永遠に残そうと丹精込めて彫ったと伝えられる芭蕉木像(小松市指定文化財)がある。事前に連絡をすれば芭蕉木像を拝観できる。

小松市寺町94 ☎0761-21-3170

3 本折日吉神社 (山王宮)



魔除け神として尊ばれ、府南山に御鎮座になり兵火にあい寿永2(1183)年本折の地に遷座された。芭蕉は小松に滞在中に神主の藤村伊豆(俳号鼓蟾)宅の句会(山王句会)に招かれている。

小松市本折町1 ☎0761-22-0163

4 多太神社 (八幡宮)



武烈天皇5(503)年創祀の由緒ある神社で、寛弘5(1008)年に多太八幡宮と称した。宝物館には斎藤別当実盛の兜(国指定重要文化財)などがあり、芭蕉も多太神社を訪れた際に拝観している。宝物館は事前に連絡をすれば見学ができる(拝観料300円)。

小松市上本折町72
兜保存会 ☎0761-22-5678

5 那谷寺



白山信仰の寺として泰澄大師が開山、花山法皇が中興のち前田利常により再興される。本殿、三重塔、鐘楼などは加賀藩のお抱え大工、山上善右衛門の手により建造される。国指定重要文化財。芭蕉と北枝は山中から小松へ戻る途中にこの寺を訪れた。

小松市那谷町ユ122 ☎0761-65-2111

6 小松天満宮



加賀前田家三代前田利常公により明暦3(1657)年創建された。小松城の東北にあたり、鬼門鎮護のために建造、加賀藩にとっては非常に重要な神社であった。境内には芭蕉の「あかあかと日はつれなくも秋の風」の句碑がある。

小松市天神町1 ☎0761-22-2539

小松といふ所にて
しをらしき名や小松吹く萩薄

元禄2(1689)年3月27日(陽暦5月16日)、松尾芭蕉は門人の河合曾良を伴い、江戸深川から奥羽・北陸への旅に出発した。その途次7月24日(陽暦9月7日)に小松に立ち寄っている。

翌25日、多太神社に参拝。源平の合戦で討ち死にした斎藤別当実盛の遺品である甲冑や木曾義仲が戦勝を祈願する願書を拝観。夜には、本折日吉神社の神主藤村伊豆宅で行われた句会に招かれている。この席で芭蕉は「しをらしき名や小松吹く萩薄」を披露した。

26日は天候が不順だったようので出発をあきらめ、前日の句会にも出席していた越前屋歛生宅の句会に招かれている。この句会で「ぬれて行や人もをかしき雨の萩の句を披露する。小松に於いて行われた十吟「世吉」と十一吟「五十韻」の俳諧興行は、芭蕉のおくのはそ道の旅では最大規模であったとも言われている。

芭蕉も称賛した
小松うどん

おくのはそ道の長い旅の疲れを癒すため、山中温泉に滞在中の芭蕉に宛てて、小松の俳人塵生が湯治見舞いとして小松の乾しうどんを贈った。

芭蕉は返書の中で、「殊に珍しき乾しうどん二箱お贈り下さいまして、厚い志に感謝します。」と書き、再び小松へ戻る約束をしている。この手紙から、芭蕉が小松へ立ち寄った320年有余前から、当地ではうどんが名物だったことが分かる。

りぎりす」の句を奉納した。

山中温泉に9日間滞在したあと、江戸から同行して来た曾良と別れ、芭蕉と北枝は再度、小松へ向かった。

その途中、那谷寺に参拝し、「石山の石より白し秋の風の句を詠んでいる。

小松では一泊の予定が、地元の俳人たちの熱心な誘いと歓待を受け滞在を延ばし、さらに再び小松を訪れたことは、この地の俳諧が盛んだったことが窺える。



つるつるとしたのごとで
程よいコシのある麺が
小松うどんの特徴。

曾良随行日記の一部抜粋

◆七月廿四日
快晴。申ノ上冠、小太二着。
竹意同道故、近江やト云二宿ス。
北枝隋之。

◆七月廿五日
快晴。欲小立立。所衆聞而以北枝留。
立奈寺へ移ル。多田八幡へ詣テ、
真盛が甲冑、木曾願書ヲ拝。
終テ山王神主藤井伊豆宅へ行、有会。

◆七月廿六日
今日ハ歛生へ方へ被招。俳、五十句。

◆七月廿七日
快晴。所ノ諏訪宮祭ノ由聞テ詣。
八幡へノ奉納ノ句有。真盛が句也。
予、北枝隋之。

◆八月五日
朝曇。昼時分、翁北枝、那谷へ趣。
明日、於小奈二、生駒万子為出会也。

新編 おくのはそ道 角川学芸出版より



立花北枝が彫ったと
伝えられる芭蕉木像
(建聖寺蔵)



小松にある芭蕉の句碑

6 小松天満宮



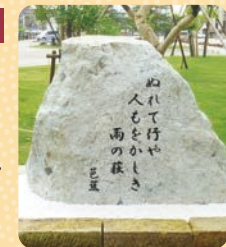
あかあかと
日はつれなくも
秋の風

7 小松大橋のたもと



ぬれて行や
人もをかしき
雨の萩

8 すわまへ芭蕉公園



あかあかと
日はつれなくも
秋の風

5 那谷寺



しをらしき
名や小松吹く
萩薄

3 本折日吉神社



石山の
石より白し
秋の風

2 建聖寺



4 多太神社



むぎんやな
甲の下の
きりぎりす



あなむぎん
甲の下の
きりぎりす

9 梯大橋のたもと



かまきりや
引きこぼしたる
萩の露

芭蕉と同行した立花北枝

小松の研屋小路(現大川町)の出身で、金沢から越前松岡(現福井県永平寺町)までの16日間ほどを体調のすぐれない曾良に代わり同行した。北枝はのちに、「卯辰集」や「山中問答」を編纂するなど、北陸俳諧の重鎮として活躍し、芭蕉十哲の一人に数えられている。

斎藤別当実盛と、幼少期に実盛に命を救われた木曾義仲は、数奇な運命により、篠原の地(現加賀市)で互いを敵として戦に挑み、その結果、実盛は戦死した。その首を見た義仲は不思議に思い、池で首を洗わせると思髪がなんと白髪になった。髪を墨で染めてまで、老兵と侮られまいとした実盛の最期に涙した義仲は、実盛の兜、脇当などを多太神社へ奉納した。



国指定重要文化財

斎藤別当実盛の兜 多太神社

